

パネル

はあまり関心を示さなかった。つぎに「場」の点では、廃寺の復興と校舎の新築が進行して分離が進んだ。そして「内容」の面では、修身教科書で仏教書の採用はほぼ皆無で、公教育の儒教主義推奨もあって、政府は徳育への貢献は想定していなかった。「場」「内容」で分離が進んだ時期である。

③ではそれが転換し仏教が公教育へ急接近する。明治一九年の第一次小学校令で小学簡易科が規定され、それを仏教本来の慈善の「場」とみて、僧侶が相次いで設立していった。さらに、②では乏しかった僧侶教員兼務論が、徳育論争と重なりながら昂揚し、井上円了や、島地黙雷ら教団上層僧侶らにもそうした主張が目立ってくる。さらに「内容」の点では、②では実現しなかった小学校用仏教修身教科書の刊行が、加藤恵証によってなされた。

ところが④の明治二三年教育勅語の発布以後、教育と仏教は再度乖離してゆく。「場」の点では小学簡易科が廃止され、仏教団の主たる社会事業は災害復興支援や戦争協力へ移る。「人」では、師範学校が軌道に乗り始めるが教員不足状況は解決されず、実態としては持続する。ただ「教育と宗教の衝突」論争においては、宗教家の教育現場からの排除意見が出され、仏教側ではそれにほとんど反応しなかった。従来容認されていた兼務も、明治二九年に文部・内務両省から正教員に関しては避けるべしとの見解が初めて出される。「内容」でも、特定宗教に関する語を慎重に避けた教育勅語が、「衝突」論争に至る過程で影響力を発揮するようになる。この論争でキリスト教攻撃の主力を担った仏教僧侶たちは、自らはむしろ「衝突せず」

に、明治三二年の内地雜居を控えて学校外での勅語解説に任務を見いださえるのである。

こうした「分離」への傾向性が強まった先に、三二年八月の文部省訓令第一二二号、官公私立の小・中学校・高等女学校での宗教教育禁止という厳格な原則があらわれる。そこにも仏教教団から反対が表明されることはなかった。公教育と仏教はこのように住み分けがなされる経験をへて、訓令をうけいれる素地がある程度形成されていたのかもしれない。

大乘非仏説論の歴史的展開

——近世思想から近代仏教学へ——

西村 玲

日本近世における大乘非仏説とは、「大乘仏教は、釈迦の説ではない」という主張のことである。一七〇〇年代半ばから始まり、国学者らと僧侶間の論争となつて、一九〇〇年代初頭まで、約百五十年間にわたって続いた。近世後半からの仏教衰退期における主な論争の一つであり、日本仏教思想近代化の歴史的過程を如実に示すトピックである。

従来、大乘非仏説の歴史的展開は、近世中期の富永仲基から、明治時代の仏教学者・村上專精らと清沢満之の精神主義に至るまで、いわゆる近代合理性の単線的な図式として描かれてきた。しかし、大乘非仏説を主張することにより僧籍を離脱す

るまでに至った近代の村上專精が、もつとも高く評価したのは、たとえば近世律僧の普寂であった。大乘非仏説に見られる近世から近代への仏教思想の推移は、仲基に見られる合理性のみならず、普寂に見られる宗教性があつてこそ初めて可能であり、両者があいまって近代の精神性を形作る源流の一つになりえたと思われる。

富永仲基は、歴史上初めて大乘非仏説を唱えた人物として、高く評価されてきた。その近代性とは、これまで前近代とされてきた仏教思想から見たときに、始めて理解できよう。仲基は、釈迦の本意は世俗倫理にあることに、仏教の聖性を剝奪し、非宗教化した。仏教の宗教性を否定した仲基は、その自信によって、大乘經典が付け加えられていった歴史的過程を述べる。儒学を旨とする大坂懷徳堂の学風でもあつた世俗性が、仲基の思想の中核であつたからこそ、彼はいわゆる大乘非仏説を主張することができた。

一七〇〇年代半ばには、富永仲基とは別に、仏教者においても大乘仏説への疑問が生まれた。まず浄土律僧の敬首（一六八三—一七四八）、同じく浄土律僧の普寂（一七〇七—一七八一）である。彼らは、戒律を始めとする經典の研究とその実行によって、インド原始教団の再現を目指した。そうした生活の中から、「釈尊が亡くなって数百年の後に、なぜ始めて大乘仏教が現れるのか」という問いが生まれてきたと思われる。律僧における大乘仏説への疑問は、教相判釈の理論を根底におきながら、「大乘仏教は凡人の手に届かないから、凡人であれば小乗仏教を實行すべきだ」という結論となる。彼らの疑問は、小乗

と大乘の統合を目指す理論を導き、現実生活ではインド原始教団の復活を目指す根拠となった。仲基と通底する近世の合理主義的な懷疑は、彼らの宗教性から必然的に生まれてきた近代への火種であり、さらなる実践を導く導火線となった。その精神は、次世代にあたる真言律僧の慈雲（一七一八—一八〇五）にも、釋尊復古の正法律として受け継がれる。

明治三〇年代に、大乘非仏説論争に学問的な終止符を打った村上專精は、富永仲基を高く評価すると同時に、近世律僧の主張をそのまま援用して、大乘仏教は歴史的現実とは別次元の真理であるとする。しかし村上においては、小乗仏教を實行すべきだ、という結論にはならない。村上は、大乘仏教を歴史から超越する絶対的なものとして棚上げすることにより、学問における信仰の分離と定式化を行って、客観的な仏教史の研究を可能にし、近代仏教学への道を内面から開いたと言える。

近年、下田正弘により、十九世紀西欧で形成された近代仏教学の性格が明らかにされてきた。西欧という他者によって発見された仏教は、宗教というより哲学として見られるものであり、現実の生活としての仏教を生きる信仰者を排除する学問であつたという。仏教が近代宗教として生き残るためには、その西欧仏教学の輸入消化が至上命題の一つであつた。聖俗両面からの近世思想を利用した村上の大乘論は、時代の要請に応えて、エリート僧侶を始めとする近代仏教者を内から支える役割を、ひとまず果たしたものと思われる。